



四十二浦巡り回想(一)

小川 幹雄

思い起こせば、初めて祖母と四十二浦巡りに出かけたのは、小学校の一年生の春休み、六十年前のことである。旅立ちの朝、両親や親戚の者に見送られて故郷を後にした光景は、光を失った今でも鮮明に眼裏に浮かんで来る。私が生まれたのは八束郡加賀村字別所(現松江市島根町加賀別所)という戸数七十軒余りの谷間の地区である。

小さい頃から他の子供たちと同じように遊んだり学んだりしていたが、入学後片方の目が悪いということがわかった。何の不自由も感じていなかった私は、特に動揺することはなかったが、家族の驚きと狼狽は大変なものだった。松江の眼科医に診察に行ったり、神仏に頼るなど私の開眼を願う宮みが始まった。

特に信心深かった祖母は、孫の開眼を一心に祈って自らの健康も顧みず、いろいろと骨を折ってくれた。その一つが目のお薬師さまの最高願かけと言われていた徒歩での四十二浦巡りである。これは半島部の四十二浦の潮を汲んで土地の氏神様にお参りをして、一本の竹すつに納めた四十二浦の潮を一畑様に納めるといふものである。船で回るより歩いて回る方が御利益が大きいと聞かされていた。

旅立って直ぐに、山路に入り、枕木山を越えて本庄に下りた。その後は中海沿いに一番目の浦、美保関町の福浦を目指して歩いた。生まれた村以外には行ったことの無い七歳の子供には、目にするものが何でも珍しかった。万原の隧道(トンネル)は、初めて通ったものだけに今でもあの暗闇の不思議な空間が脳裏に浮かぶ。

福浦で潮を汲み、二番目の美保関に着く頃は春の日暮れが近かったのだろう、祖母の友人の妹さんが



美保関町万原の旧森山隧道

嫁いでおられるさかさん宅を訪ねて泊めてもらうことになった。初めて泊まった他所の家だったが、おばさんの名前と年上らしい男の人がおられたことだけは覚えてる。

二日目は山越えをして日本海側に出、三番目の雲津、四番目の諸嶽への道中は山道で波の打ち寄せるような岩伝いにも歩いた覚えがある。五番目の七類に出た頃、ようやく平坦でパスの通るような道になった。六番目の惣津、七番目の笹子を抜け、八番目の片江、九番目の菅浦、十番目の北浦にさしかかる頃には宿を探さなければならなくなってきた。が、次の十一番目の千酌は遠い親戚があることのでかきなり遅くなっていたが千酌まで行き、そこで泊めてもらった。そこにはご夫婦と男の子がいたように思うが祖母は、久しぶりの対面だったのか懐かしそうに話していた。

三日目は十二番目の笠浦、ここから野波村に入り十三番目の野井、十四番目の瀬崎、十五番目の沖泊りであった。隣村なので祖母の知り合いも多く、多古では遠縁に当たる家で昼食を取らせてもらった。爪坂峠を超えて、ようやく加賀にもどり、別所に着いた時は、とつぷりと日は暮れていた。我が家のそばまで帰ったのに、浦巡りの途中というので我が家には立ち寄れず親戚の家に泊まった。(続く)

(島根県立盲学校講師)

韓電神社に参拝して

板垣 宏

今にも雨の降りそうな日に神社に向かいました。天気が良いとこの神社の周りは薄暗いところが多く、光が当たるところは白く飛んだ写真に仕上がります。

自家用車だと神社の登り口近くに駐車場があり、側面に祀られているサノオの命が乗ってこられたという大きな四角い岩船が迎えてくれます。上り口には十数本の杖が置いてあり、不揃いの急な石段を上るための必需品です。片側だけにロープが上まで繋がっていますので、それを手でたぐりながらの登坂となります。

息が上がる頃に両側に大きな岩壁がそびえたち、その間に40cmばかりの穴状のところがあり難所です。長さは1.5mばかりですが蟹のように横歩きで前の大岩の壁を両手で押さえながら足はわずかな上りを少しずつ上へ上へと進まねばなりません。(滑らない靴を用意してください) その行が終われば神社はそこです。

神社の上は大きな岩盤が社殿を覆っています。作りは、神社というより蔵玉堂の感じで、智那尾権現といわれていた理由ではないでしょうか。

お賽銭を六百円納めお札とお守りを持ち帰りましたが、お守りは「安産守護」・・・まあいいか・机の上にもあります。

(日本写真家協会会員)



出雲市平田町唐川 韓電(からかま)神社

「巡り」の旅とは

関 和彦

四十二浦巡り、その「めぐり」は「回る・まわ(は)る」とは異なる行為のようである。

これという確証はないが、四十二浦巡りの起源にかかわるイザナミの死、イザナギの黄泉国訪問、イザナギの穢れと禊ぎ、その二柱の神の神婚は「天の御柱」の「めぐり」が始まりであった。イザナミ・イザナギの「天の御柱」の「めぐり」は象徴的である。「古事記」は次のように語る。

汝は右より廻(めぐ)り逢へ、  
我は左より廻り逢はむ

注目されるのは「めぐり」+「あはむ」、すなわち今にいう「めぐり合い」の原形というべき表現である。「めぐり」に似た「回る」という行為にはその「あはむ」が付くことはない。「めぐる」とはあるもの、あることとの出会いを期待して「まはる」行為であり、イザナミ・イザナギの場合は天の御柱をおのおの左右から「まはり」、出会い、結婚することであった。それは「回る」ではなく「巡る」行為であった。

四十二浦の巡りはどうであろうか。それは四十二浦「回り」という肉体的行為ではない。四十二浦を訪れるとすべての浦々に神社が鎮座し、神々が参拝者を迎える。四十二浦「巡り」は「めぐり合い」であり、神々との「めぐり合い」



佐太神社にて、関和彦氏と朝山宮司

を求める旅であった。今、私たちはその四十二浦巡りの心を受け継ぎさらにも「めぐる」人々との出会い、そして浦々の人びととの出会いの旅、それは「廻り(巡り)逢はむ」旅として今、わたしたちの足もとにある。

(研究会座長)

「鹿島・島根七浦巡りバスツアー」を迎えて

野波浦日御崎神社総代長 余村敏彦

七月三十一日「鹿島・島根七浦巡りバスツアー」。当日は朝から暑い日となりそうな青空、しかし潮風が爽やかだった。

日御崎神社には、宮司、区長、区長代理、神社総代を迎える中、昼前に来社された。日御崎神社の由緒記を配布。汐波みについては「忌明けの際、野波の湾内七箇所で青竹の筒に汐(海水)を汲み、神社参拝、海草に浸し家を清め、また神主による清め祓いが行われている。また、正月等の神社参拝時に、海草で汐を汲み参拝する習慣がある。」こと等を説明。また過去全国やローカルでも放映されたことのある十月二十三日催行のガッチ祭りについては、集合写真を見て頂き概略説明(資料を配布)。

小波浦 奴奈彌神社 小波海水浴場を一望する高台川岡孝二総代長より汐波みのこと、毎年二月十一日に行われる伊勢祭りと神主による大漁占いのこと等が説明された。

多古浦 八幡宮 多古の港、日本海西の海岸線、加賀の潜戸等広く一望できる高台

小川勝利総代長より汐波みのこと、津和野城家老職多胡左衛門丞の勧請創立の伝え等が説明された。

沖泊浦 津上神社 沖泊の港を望む高台

小川将総代長より汐波みのこと、津和野城家老職多胡左衛門丞の勧請創立の伝え等が説明された。



マリナーパーク多古鼻(島根町)

沖泊の神社で、神社は清々しくていいですねと参加者の一人がしみじみと言われた。関係者として大変うれしく思ったことでした。真夏の午後の暑い最中と風が吹く、本日に爽やかでした。こうしてお客様を迎え、改めて当地区の風景の素晴らしさを思うところです。

一例として、「天空の岬」と名づけられたマリナーパーク多古鼻からの日本海の眺めは実に雄大です。はるかに隠岐の島々がかすみ、水平線は地球が丸いことを教えます。日本海の日の出、日の入りは時がたつのを忘れるほど本当に素晴らしいものです。

わずかな時間でしたが、各社において質問や熱心な見学を頂き、また地元としても豊かな自然と産土神社を再認識出来大変有意義でした。これを契機に私たちが愛する、海いだく郷を再訪され豊かな自然に浸りながらゆつくりと参拝していただきたいと願うところです。



野波浦日御崎神社説明風景